

〔研究ノート〕

田能村竹田の草花図・花鳥図に見られる呉派の影響
—魯治筆「百花図巻」との類似に注目して—

岡藩出身の文人画家田能村竹田は山水図の名品だけでなく、濃彩の草花図・花鳥図も比較的多く残しています。文化6年(1809)の年紀のある「四季花鳥図」(重文・四幅対・大分市美術館蔵)に代表されるよう、特に画業の初期に華やかな彩色を用いた花鳥図・草花図が見られます。その理由の一つとしては、竹田が若い頃に南蘋派の画風を学習したことが関係していると考えられます。竹田の作画における初期の師であった淵野真斎、渡辺蓬島は共に、岡藩に南蘋風の花鳥画を広めた淵上旭江に学んでいました。沈南蘋は享保16年(1731)に来日した清の画家で、その重厚で写実的な画風は江戸時代後半の日本の画家たちに多大な影響を与えました。先述の竹田筆「四季花鳥図」に見られる、没骨で花を表し、濃厚な色のグラデーションで花弁や葉の立体感を表現する描写は、竹田の南蘋派学習の成果が窺えるものとして指摘されています。確かに竹田の草花図・花鳥図には南蘋画風の影響もあると考えら

れますが、本稿では、魯治筆「百花図巻」(広東省博物館蔵)と竹田作品を比較することにより、竹田の草花図・花鳥図は南蘋派以外に呉派からも影響を受けていることを指摘したいと思います。

魯治の詳細な伝記は不明なもの、作例や文献から、16世紀半ばに蘇州で活躍し、草花図を得意としていたことが分かっています。当時蘇州では、沈周を祖とする呉派と呼ばれる文人画家たちが活躍しており、魯治も呉派と関わりの深い画家でした。嘉靖35年(1556)の年紀がある「百花図巻」(広東省博物館蔵)は魯治の代表作の一つとして挙げられ、約30種の花々が濃厚な彩色で精緻に描かれています。竹田筆「四季花鳥図」とこの図巻を比べてみると、竹田の描く黄蜀葵の花一輪(図1)と木蓮の一枝(図2)は、「百花図巻」に描かれるもの(図3・図4)と花の角度、葉の付き方などにおいて酷似しており、竹田が魯治作品を参考にしていただ可能性が考えられます。

魯治の「百花図巻」と関係する

竹田の作品としては、「沈香亭余紅図・梅花芙蓉図」(大分県立芸術会館蔵、図5・図6)も挙げられます。文化5年の年紀があり、現在は対幅に仕立てられています。もとは竹田荘を飾っていた小襖でした。この竹田作品中の牡丹(図5)と魯治の牡丹(図7)を見ると、色は異なりますが、真横から捉えられた独特の花の形状から葉の位置まで一致します。椿・梅も枝振り・花の姿形などが類似することが見て取れます(図6・図8)。その一方で、竹田作品に描かれる芙蓉は、魯治の「百花図巻」には描かれておらず、薔薇・石榴に関しては、魯治作品の中にも見られるものの、形状がびつたりとは重ならず、竹田が創意工夫を加えている部分も多いと考えられます。

魯治は百花図を得意としており、北京故宮博物院にも異なる花々を描いた百花図巻が残されています。また、魯治と同時期に活躍した呉派の陸治の「仙圃長春図」(台北国立故宫博物院蔵)には、魯治の「百花図巻」(広東省博物館蔵)と共通する花が多く描かれ、花の姿が類似することが知られています。両方の祖本となる存在があった可能性もありますが、描写密度や作品の年紀、両者の交遊関係から、魯治の作品を陸治が倣った可能性が高いことが指摘されており、魯治の百花図は好評を得ていた作品であったことが窺

えます。竹田が花の描写において参考とした作品は魯治筆のものであったのか、その周辺の模本であったのかは不明ですが、魯治筆「百花図巻」(広東省博物館蔵)と竹田作品の確かな類似性から、竹田が「百花図巻」の類本を目にしていたことは明らかでしょう。幕末には魯治の草花図巻が日本にあったことが文献から分かっており、竹田が魯治の作例を見た可能性も高いです。竹田が参考とした作品の筆者を呉派の画家として認識していたかについては更なる調査が必要ですが、竹田は文化5年頃に呉派の祖である沈周に倣った山水図を積極的に描いており、近い時期に描かれた「四季花鳥図」(沈香亭余紅図・梅花芙蓉図)も、やはり呉派の作例を学ぶ意識を持って制作された可能性があります。江戸時代の文人画家にとって呉派は中国文人画を復興させた模範とすべき画派の一つでした。

呉派は前代までの文人画家に

比べ、草花図を好んで描いており、竹田に草花図・花鳥図が多いのも南蘋派学習の成果というだけでなく、呉派の作例を通じて、文人らしい画題として取り入れた側面も考慮する必要がありそうです。魯治作品と竹田作品は、花の形は類似していても、彩色感覚や細かな表現方法には相違も多く見られます。竹田が中国の草花図を学んだ上で、独自の感性をどのように表しているのかについてはまた稿を改めて考察したいと思います。

(宮崎もも)

※竹田作品は『田能村竹田画譜図版篇』(思文閣出版、2011年)、魯治作品は『明清花鳥画』(広東省博物館・香港中文大学文物館、2001年)より複写しました。

図1 竹田 四季花鳥図



図2 竹田 四季花鳥図

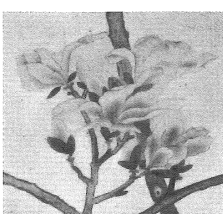


図8 魯治 百花図巻

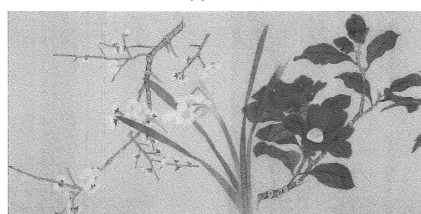


図3 魯治 百花図巻



図4 魯治 百花図巻



図6 竹田 梅花芙蓉図



図5 竹田 沈香亭余紅図

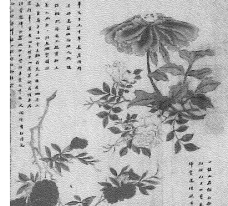


図7 魯治 百花図巻

